

第3回

栃木県立夜間中学設置準備等に係る意見交換会 議事録

開催日時：令和6（2024）年10月7日（月）午後3時から午後4時30分

開催場所：県庁舎東館4階 講堂

栃木県教育委員会事務局義務教育課

第3回栃木県立夜間中学設置準備等に係る意見交換会 議事録

1 開催日時 令和6（2024）年10月7日（月） 午後3時から午後4時30分

2 開催場所 県庁舎東館4階 講堂

3 出席構成員（敬省略）

佐々木 和也、野原 恵美子、結城 美鶴、小川 美穂、青木 千津子、小森 祥一
日向野 晃、福田 治久、瓦井 千尋 以上9名（全10名中）

4 議事内容

県立夜間中学設置に向けた今後の取組について

協議題「県立夜間中学を核とした多様な学びの場との連携の充実について」

事務局	（資料1を用いて、協議題について説明を行う。）
座長	<p>事務局から協議題について説明があった。協議内容は大きく2つに分かれている。1点目は、学校説明会等の実施に向けた今後の取組の特に周知方法等について。もう1点は、これまでの議論でも各関係機関との連携が必要だという意見をたくさん頂戴しているが、そのような御意見をもう一度整理しながら、今後、学校がどのような体制で臨むことがよいかという各関係機関との連携体制について。</p> <p>その前に、本日欠席の鈴木委員から事前に提出されている御意見について、事務局から御紹介いただきたい。</p>
事務局	<p>鈴木委員の御意見を代読させていただく。</p> <p>「まず、学校説明会については、県民や対象者に広く周知する必要性から、学校説明会の開催は、県内複数箇所複数回実施することが望ましいと考える。説明内容を補足するために、「パネルディスカッション」を行い、複数のパネリストが県立夜間中学校の趣旨に迫るテーマについて討論し、参加者との意見交換を行うと、理解が深まると考える。また、説明会等の案内については、まずはアンケート協力者と自主夜間中学に案内するとともに、事前・事後において、テレビ、新聞などで報道してもらう。さらに、県教育委員会のホームページにより、広く発信するとよいと思う。」</p> <p>「次に、関係機関との連携については、特に、自主夜間中学との連携により先行事例の入手、生徒の交流、運営課題の把握が必要と考える。また、地域とともにある学校づくりとして、栃木市特有の事業所、例えば岩下食品や栃木レザーなどとの連携も考えられる。さらに、他県の公立夜間中学との定期的な情報交換や国際交流センター等の外国人支援団体の常時支援により、通訳や異文化理解等をより充実させることができるのではないかと考える。」</p>
座長	<p>ここからは、出席の各委員から意見を伺う。論点が2つあるので、まずは学校説明会実施に向けた連携について、意見を頂戴したい。</p>

(I) 学校説明会実施に向けた今後の取組

小川委員	学校説明会実施に向けた連携の充実について、鈴木委員の意見に賛同する。不登校支援の観点からは、学校に通えない子どもや学齢期を過ぎた子どもたちが所属できる団体が少ない現状から、フリースクールや不登校の親の会、図書館などでの広報が有効であると考ええる。さらに、対面とオンラインの両方で説明会を開催し、当日参加できない保護者や当事者の方にも雰囲気や情報が伝えられるとよいと思う。県立夜間中学について、広く対象となる子どもたちに伝えたいと思っている。
座長	情報が届きにくい状態にある方に対して工夫が必要であるという意見をいただいた。特に、コロナ禍以降、オンライン会議が普及している現状を踏まえると、説明会をハイブリッド開催し、さらに、その内容をアーカイブにして、当日参加できなくても雰囲気を含めた情報が入手できるよう工夫されるとよいのではないかと考える。
結城委員	やはり、県立夜間中学が支援団体とつながるといことが、大きなポイントの1つになると考える。県内にはたくさんの多様な学びの場があり、そこには県立夜間中学を必要とする学習者も学びに来ている。まずは、支援団体と県立夜間中学がつながる場を設けることが大切である。例えば、支援団体が集まる意見交換会を開催し、交流の場を設けることで、県立夜間中学が支援団体と共に作り上げられるものとなる。県内にはたくさんの支援団体があるが、できるだけ多くの団体とつながり、その際に、学校説明会もできるだろうし、支援団体から学習者の状況や、学習ニーズを聞くこともできるだろう。最初から完成形を目指すのではなく、やりながら改善し、多くの団体とつながることが、学校の周知や運営において大切であると考えている。
座長	先ほどの発言のキーワードは、「継続的な周知」である。令和8年の開校までの周知だけでなく、その後も継続的に情報を提供することが必要である。各種支援団体と連携するために、県立夜間中学がプラットフォームとして機能し、継続的な情報提供ができる体制を整えることが重要である。これにより、支援団体と共に継続的にアップグレードしていけるような体制を構築するという御意見である。
日向野委員	県内3か所での説明会開催について、例えば、会場として学悠館高校を使用することを提案する。高校生が勉強している場ではあるが、説明会を通じて県立夜間中学のイメージをもってもらうには有効ではないか。日程調整を行い、県南での説明会開催時には、学悠館高校を利用することを検討していただきたい。
座長	具体的な提案として、学悠館高校を説明会の会場として利用することを御提案いただいた。特に県南で開催する場合には、ぜひ学悠館高校を会場として利用することを検討していただきたい。
野原委員	潜在的なニーズを掘り起こすことが大切である。説明資料については、内容がわかりやすく、引きつけるものを作成するとよい。また、資料は「やさしい日本語」で作成することを基本とし、可能な範囲で多言語対応できるとよいのではないかと。
座長	情報提供の前提として、フライヤーなどの資料も含めて多言語化を検討する必要があるという意見である。多言語対応にする際、表現の簡便性や容易性についても、しっかりと検討するよう御提案いただいた。
福田委員	県立夜間中学の設置は、行政にとって大きなエネルギーを要するものであり、時代

	<p>の流れに沿った重要な取組である。学校説明会を含めた周知活動においては、報道関係の方に理解と協力をいただけるとよい。また、PTAでは様々な事業を行っているので、関連事業において、県立夜間中学担当者による説明の機会を設けることができると考える。11月25日に宇都宮市PTA連合会で不登校に関するシンポジウムを開催する。宇都宮市の一斉連絡メールで全ての家庭に連絡しており、参加される方は、不登校の悩みを抱えている保護者である。毎年約150名の方が参加される。県総合教育センターでの開催であり、多くの保護者が参加するため、対象となる保護者に直接説明する機会となるのではない。</p>
座長	<p>直近の情報提供に感謝する。事務局は、前向きに検討いただきたい。ただし、フライヤーがないと混乱を招く可能性があるため、フライヤーが間に合うのであれば、御検討いただきたい。また、マスコミの協力は欠かせないとする。若者世代はテレビを持たない方が多いため、情報収集の手段が変わってきている。テレビのみならず、ラジオやSNS、特にYouTubeなどを活用し、多様な世代に対応した情報提供を検討するとよいのではない。</p>
小森委員	<p>前回の会議で示されたニーズ調査結果では、回答者の国籍は日本人が約4割で、それ以外の方は外国人であるという実態がある。外国人の方にも対応できる説明会にすることが重要であり、外国人の方がその情報を得る手段を作っていくことが、1つの大きな課題である。成人した外国人は、仕事をしていると想定されることから、平日の説明会に参加しにくいと思われるので、インターネットやSNSを活用することが有効である。また、小中学校で外国人を受け入れている「日本語教室」に通う子どもたちの保護者の中には、学び直しを希望する方がいる可能性もあるので、当該小中学校の校長先生に説明会の趣旨を伝え、「日本語教室」を通じて、保護者の方へ情報を伝える仕組みを構築するとよいのではない。</p>
座長	<p>「日本語教室」が設置されている学校の校長に対し、子どもたちを通じて、その保護者にも周知していくことを提案いただいた。</p>
青木委員	<p>不登校経験者の方の学び直しという観点から、不登校経験者の掘り起こしの一環として、県内各市町にある教育支援センターの機能を活用し、情報発信をお願いするとよいのではない。また、小森委員の発言にもあったように、外国人の割合が高ことから、国際交流協会などを通じて、外国人コミュニティや様々な活動、イベント等で口伝えに情報を伝えることもよいのではない。</p>
座長	<p>各市町に設置されている教育支援センターとの連携及び国際交流協会との連携が重要であるという御意見でした。</p>
野原委員	<p>今年度のニーズ調査では、外国人ネットワークや地域日本語教室、外国人の集まる場での周知ができたことを踏まえ、引き続き、これらのネットワークや口コミを十分に活用したいと考える。</p>
瓦井委員	<p>各委員から挙げられた意見の他に、学校説明会の周知について、公共機関や駅、電車、バスといった交通機関でも「学校説明会が何月何日に開催される」と周知する必要がある。また、保健福祉センター、ボランティアセンター、非営利事業の炊出し会場、簡易宿舎、ハローワークなどでも周知することが必要ではないか。これらの場所</p>

	での周知活動を通して、今後、関係機関とどのような連携を図るかという２つ目の協議内容がつながっていくと考える。
座長	<p>前提となる「説明会がある」ということをまず知っていただくために、各委員から出た場所とつながり、できる限りの周知を行うことが重要である。最初の説明会に向けた取組についての協議は、以上で一旦終了とする。</p> <p>次に、この意見を踏まえて、これから実際に学校を構想していく上で、どのような連携を更に充実していくべきかについて、御意見を頂戴したい。</p>

(2) 今後の学校体制づくりにおける連携の充実

小川委員	不登校に関連する団体として、昨年「とちぎ多様な学び場MAP」を作成し、親の会やフリースクール、居場所など多くの団体を掲載した。今年は運営者が80人ほどに増え、新たに作り直す予定である。このマップが全てを網羅しているわけではないが、子どもたちがどこで学び、どこで過ごすかを選べるようにし、継続的に学校以外の多様な学びの場とつながれるようにしている。自然体験や職業体験ができるなど、多様な学びの場があるので、各学びの場の多様性を認め合い、学校だけでは対応できない部分を補うために、既存のネットワークを活用し、さらに広げていきたいと考えている。
座長	もう一度そのマップを見せていただきたい。
小川委員	これは、県教育委員会の協力で昨年作成したもので、親の会、居場所、教育支援センター、総合教育センター、自主夜間中学などを掲載している。相談場所も含まれている。作成後も多様な学びの場や親の会が増えており、シンポジウムやイベントを通じて、継続的にネットワークを広げている。80団体に一斉に情報が行き渡るネットワークを構築しているので、今後の周知において活用いただきたいと考えている。
座長	<p>先ほどの周知も含めて、有効に使える既存のネットワークがあるため、これをしっかりと連携させていただきたい。また、結城委員から提案があったように、夜間中学がプラットフォームとなり、中核となる関係機関としっかりと連携することが重要であるとする。</p> <p>不登校関連について、青木委員の御意見も伺いたい。</p>
青木委員	本市でも不登校児童生徒が急増傾向にあり、数年来の難題である。不登校児童生徒の保護者が非常に苦しんでいる現状があり、数年前から居場所を提供する方々と連携して保護者の相談会を年に1、2回開催している。そのような場所で夜間中学の新設に関する情報を発信し、ママ友ネットワークや関係団体、民間団体と連携していけるとよい。
座長	保護者の悩みを解消するために、県立夜間中学という選択肢を周知できるよう、保護者ネットワークと連携していくことも大切である。
小森委員	先ほどの学校説明会の実施について、意見を付け加えたい。資料Ⅰに「来年1月から3月に説明会を実施する」とあるが、来年1年間は準備期間なので、説明会を継続して実施して欲しい。また、恐らく準備室のようなものが設置されると思うので、個別相談窓口を開設し、情報が得られるような準備をお願いしたい。

	<p>連携について、栃木市は様々な環境が整備されており、例えば、みかも自然の家や渡良瀬遊水地で自然体験活動ができる。また、県立の農業高校、工業高校、商業高校があるので、そのような高校との連携も大切である。栃木市の人々や自然に触れる活動を通じて、連携が図られるとよいのではないかな。</p>
座長	<p>先ほどの学校説明会について、令和7年度も県として継続的な説明会実施をしていただきたいという御意見である。事務局には、検討をお願いしたい。</p> <p>連携については、栃木市は多くの県立・私立の施設が充実しているため、そのようなところと連携することに加え、教育課程の編成でも、栃木市の資源を意識していただきたい。先ほど紹介いただいた鈴木委員の御意見に、岩下食品や栃木レザーなどの地元企業との連携が挙げられていた。総合的な学習の時間やキャリア教育等で地元企業と連携できるとよいという御意見である。</p>
青木委員	<p>栃木市の学悠館高校に県立夜間中学校が設置されることを嬉しく思う。だからこそ、栃木市がもつソフト面、ハード面の教育資源をフル活用していただきたい。栃木市は、8校の県立学校があり、國學院栃木高校を含めると9校の高等学校がコンパクトな場所に集まっている珍しい地域である。栃農生、栃工生、栃商生が中学生に対して「出前講座」を行なっている。そのような高校生を県立夜間中学にも活用できたらよいと考える。</p> <p>また、栃木市は1市5町が合併し、それぞれに誇れる自然があるので、フィールドワークや総合的な学習の時間で、栃木市の環境を生かした活動を行えるとよい。さらに、栃木市では13年前に「栃木未来アシストネット事業」を立ち上げており、学校ごとに学校支援ボランティアのグループがある。そのグループに登録されたボランティアの方が、授業支援や環境ボランティアなど、様々な面で学校の力となっている。県立夜間中学の授業支援にボランティアの方が必要だという要望があれば、学校支援に慣れているボランティアの方々がいるという地域性があるので、きめ細かな支援ができるように関係者に協力いただくことが可能であると考えている。</p>
座長	<p>有益な地元情報に感謝する。特に各中学校区にあるボランティア人材バンクは、活用できるのではないかなと思う。また、県立学校8校の高校生が県立夜間中学の生徒たちに対して教育活動を行う場を提供するという「チャイルド・トゥ・チャイルド・エデュケーション」は、同世代間の交流が促進され、とてもよい。ただし、県立夜間中学の生徒とは同世代ではないことも考えられる。この場合も、多様性の時代に対応していくための生きる力を養成するという観点においては、重要な役割を果たすのではないかな。</p>
野原委員	<p>外国人生徒支援には、日本語が十分でない保護者の理解が必要だと考える。県立夜間中学において、通訳ボランティアによるサポーター制度の導入や、支援団体等を募集することが有効ではないかな。また、今後は教員向けに日本語指導研修が行われると思われるが、そのような教員対象の研修においても関係機関が連携して支援・協力していけるとよい。高校進学や就職にあたっては、外国人特有の在留資格の問題もあるため、関係機関が十分に連携し、情報共有を図っていく必要があると考える。</p>
座長	<p>外国人、外国にルーツをもつ対象者とその保護者の方の支援ができるとよい。</p>
結城委員	<p>どのような関係機関と連携するかについて、小山自主夜間中学の例を挙げさせても</p>

	<p>らう。小山自主夜間中学は、小山市のスクールソーシャルワーカー、生涯学習課の学びの教室、ひきこもり相談室とつながっており、学習状況等に関する情報交換を行うなどの連携をしている。また、外国籍の方の学習については、地域日本語教室から「オーバーエイジの方が高校進学を希望しているので、自主夜間中学で見てくれますか」のように情報共有を図るという連携をしている。小山自主夜間から5名高校進学をしたが、高校進学を希望している方たちに対しては、学校説明会に同行し、説明内容を分かりやすく伝えるなどの支援をしている。小山自主夜間中学から茨城県の結城一高に進学する生徒が多い。その理由は、結城一高は学校内に日本語支援のNPO団体が入っているためである。私たちが学校説明会に行った際、そのNPO団体とつながることができ、まだ受験前の段階だが、オンラインで勉強を見てくれている。受験資格や書類を揃えるのは大変だが、担当者の方とやり取りをしながら受験の事前準備を進めることもできる。このような事例から、各関係機関に担当者がきちんといることがとても大切であると感じている。現在、3年前に結城一高に入学した高校3年生の生徒がいるが、その生徒の状況などについて、未だに連絡を取り合っている。そのような形で担当者が決まっていることが大切であると考え。もう1点のどのような取組が必要かということについては、学校運営協議会を設置する際には、そこに支援団体が入ることがとても大切だと思うので、御検討いただきたい。</p>
座長	結城一高では、外国人に対応できるNPOの日本語支援団体が常にいるのか。
結城委員	常にいる。
座長	<p>結城一高では、支援団体のスタッフが夜間中学とつながっている。先行して行われている夜間中学との連携モデルを県立夜間中学に取り入れるという視点が大切である。また、支援団体代表を学校運営協議会の委員として招くことが非常に重要であるという提案をいただいた。事務局にはこれを十分に検討していただきたい。</p>
瓦井委員	<p>大変すばらしい御意見等に感服している。県立夜間中学の入学生徒の層は、端的に言うと、高齢者、不登校経験者、外国籍の方、正しく表現すると「日本語習得が十分でない外国籍の方」の3つの層に分かれている。1つ目の層（高齢者）は、数的には徐々に少なくなってくるという印象を持っている。2つ目の層（不登校経験者）は、国が今、不登校対策で「COCOLO プラン」というものを行っており、例えば、学校の中に子どもたちが通えるスペシャルサポートルーム等を作るという考えがある。果たして同じ敷地内に特別教室を作ったところで、学校が嫌だった生徒たちが教室に入れるかどうかという不安はあるが、国の施策としてある。そして3つ目の層、外国籍の方に関しては、右肩上がりが増えていくだろうと思う。こうした現状の中で、このような方々に対して、どのような対応が必要なのだろうか。1つ目は、学びの支援。2つ目は、心理的な支援、特に不登校経験者の心理的なサポートが必要であると考え。そして、もう1つが医療を含めた福祉的な支援。もしかすると、虐待に遭っている方、いじめを経験した方もいるかも知れないことから、医療や福祉との連携も必要であると考え。学びの支援、心理的な支援、そして医療・福祉的な支援から、想定する関係機関を掘り起こしていくことが必要であると考え。</p> <p>各委員から関係団体となる機関等が挙げられたが、それぞれの機関には、本来の役割や設置の意義があり、経営方針も異なる。県立夜間中学における教育活動が充実す</p>

	<p>るための連携を図っていくためには、本校の設置理念、経営方針、目標というものを連携する関係機関の方にも認識してもらわないといけない。他県では、事前に想定していた入学者と実際の入学者に相違があったという例も挙げられているので、事前の学校説明会ではもちろんだが、連携する各機関の方やより多くの方に本校についてきちんと周知を図ることが必要だ。その上で、ネットワークを構築することになるが、事務局が1対1で各機関と対応していくのでは負担が大きいので、まず、連携する各機関同士にもネットワークを構築していただくことが必要である。県立夜間中学を充実させるためにも、連携する各機関のねらいが違うところを生かせるとよい。同じねらいの機関で活動しても十分な効果が得られない。むしろ様々な異なる役割、目標をもっている組織や機関の方々と「県立夜間中学がこうになって欲しい」という願いを共有し、協力していただけるとよい。そのようなネットワークを充実させるためには、県立夜間中学と学びの場との連携をコーディネートする専任の職員を本校に1人設置するのがよい。校長は、学校経営を行うために、教育課程の編成や校内の教職員配置などを行い、学校運営協議会では、メンバーの1人として活躍することになるため、校長以外に学びの場との連携を中心に行う職員を少なくともこの夜間中学が軌道に乗る2、3年ぐらいの間は配置すべきである。文科省が行っているCOCOLOプランでは、このようなコーディネーターを配置するための予算が想定されている。このような事業を有効活用し、本県の夜間中学にも利用していただければと考える。連携を充実させるということは、非常に大切になるので、各委員から御提示いただいた御意見などを踏まえて、それを生かせる役割を本校内に設置し、各関係機関との連携をコーディネートしながら取り組んでいくと、すばらしい体制が構築できるのではないかな。</p>
座長	<p>連携団体がそれぞれの強みを補完し合いながら、県立夜間中学の機能を充実させる関係性が必要である。また、窓口としての役割を果たすコーディネーターの設置が重要である。学校長がその任務を担うのは難しいため、専門的な人材が必要だろうという御意見である。学校運営協議会に各種支援団体の代表を配置し、情報共有を行うことで、学校経営を充実させる体制づくりに努めていただきたい。総括的な御意見に感謝する。</p>
福田委員	<p>改めて連携について整理すると、学悠館高校、県内全域の小中学校、自主夜間中学、外国人支援団体、不登校支援団体、保護者、地域、医療福祉など多くの関係機関との連携がある。事務局は大変だと思うが、補助金の活用などで対応していただきたい。また、地域の特性を考慮し、保護者や地域の方の理解と協力を得ることが重要である。コミュニティ・スクールも推進されているので、夜間中学も地域に受け入れてもらえるよう準備しておくことが必要である。</p> <p>私の子どもが通う小学校では、地域の特性を生かして、学習発表会を地域が主催となり学校外の施設で開催している。学悠館高校や県立夜間中学も地域の特性に溶け込むような体制を作ることが重要だと考える。</p>
日向野委員	<p>多様性という言葉は確かに魅力的だが、実際には日々混沌としている中で、1つ1つ正解を探しているところである。本校に関しても、様々な背景をもつ生徒がおり、特に外国籍の生徒は文化や目的が異なるため、実態を把握し、共に生活することの難</p>

	<p>しさを感じている。決まった方法がない中で、行ったり来たりしながら、どう進めるかを考えつつ協力して進めていくことが本当に大切だと思う。「県立夜間中学ができたから終わり」ではなく、進めながら分からないことが出てきた時に、どこに相談すればよいかを考えることがとても大切な視点ではないだろうか。先ほど瓦井委員も述べられたコーディネートに関しては、我々教員にとっては新しい役割である。子どもの実態を把握すること自体が難しく、これまでの経験では十分に対応できない部分もあるが、その上で、子どもたちの目標を実現させるためにどうコーディネートするかというのも、教員としての従来の学びには含まれていなかった新たな挑戦である。やはり、一緒に考えながら進めていくことが大切であり、行ったり来たりを繰り返すことに尽きるのだと思う。これからの社会では、一人一人に合った目標を実現していくことは非常に重要であるが、それを達成するためには、様々なテーマについて知恵を出し合うことが必要である。楽しみもあるが、非常に大変なことでもあり、それがとても大事なことだと思っている。</p>
座長	<p>やはり、継続的な改善と柔軟性が重要であるということだろう。来年度の教育課程の編成や説明会に向けて、各方面から協力を仰ぎ、知恵を出し合いながら継続的にブラッシュアップしていく体制が必要であると強く感じる。他に意見はあるか。</p>
小川委員	<p>連携の充実と継続が何より大切だと思う。特に、不登校の子どもが入学後も継続して通学できるかどうかは、とても難しい問題だと考えている。入学も難しければ、継続もとても難しい。そこを支えていくのは、あらゆる役割の皆様の継続的な支援によるものだと考える。学校説明会は、教育委員会だけでなく支援団体メンバーも一緒に入れていただき、フリースクールや外国人支援団体の活動場所など、対象者が集まる場所で開催する、対象者の言葉で伝わるようにする、生活の中で目にするようなSNSを活用するなど工夫するとよい。コーディネーターについては、行政だけでなく、民間や社会教育士などの人材を活用することも考えられるのではないかな。県立夜間中学は学校教育でありながら、多様な学びを提供し、正解が1つではないことを教える社会教育的な要素が強いところであるため、そのような人材を取り入れ、一緒に進めていけるとよい。</p>
結城委員	<p>先ほど、コーディネートが難しいという話があったが、県立夜間中学が支援団体とつながっていることで、入学してくる生徒の背景を把握し、生徒の学習ニーズに対応しやすくなるのではないかな。例えば、支援団体側も「この学習者は、(基礎的な学力は身に付いているので)来春高校受験が望ましいのか」または、「県立夜間中学で基礎的な学習を身に付けてから高校進学をした方がよいのか」など、学習者の学習状況、家庭状況、将来的な希望を把握しながら県立夜間中学という学びの場ができることを説明していくことになる。県立夜間中学の担当者が、支援団体とつながっていることで、入学後のコーディネートがしやすくなると考えられる。したがって、年に一度、県立夜間中学と支援団体が集まる機会を作っていただきたい。</p>
座長	<p>それでは、座長として協議内容をまとめる。</p> <p>本日は、「学校説明会実施に向けた連携の充実」と「今後の学校体制づくりにおける各種関係団体との連携の在り方」について、具体的な意見や要望を頂戴した。事務局には、本日の内容を今後の設置準備の参考にしていただきたい。また、この意見交換</p>

	<p>会での協議が、今後の教育課程の編成などにきちんと引き継がれることを期待する。</p> <p>委員の皆様には、事務局から具体的な体制づくりの相談があった際には、快く引き受けていただければと思う。今後、県立夜間中学が開校し軌道に乗るまで、ここで共にした委員の皆様と見守っていく体制を約束し、この後は事務局に一任したいと思う。</p>
--	---